

を乗り切ることは、シャント法  
なくしては不可能だった、と岩  
瀬さんは語る。

## シャント法の費用補助の 実現に向けて

現在、岩瀬さんは社長業のか  
たわら、「悠声会」の副会長と  
して活躍している。悠声会に入  
会したのは、退院直後に赤木家  
康医師（シャント法の実践者  
本誌2012年5月号本欄参  
照）の講演会に出かけたのが  
きっかけだった。

ここで悠声会の人々と出会い、  
「シャントでこんなに喋れるよ  
うになるんだ」と感銘を受けた。  
それがきっかけで入会し、副会  
長に就任したのは昨年5月ごろ  
のことだ。

現在、悠声会の会員数は約  
130人。岩瀬さんは悠声会の  
定例会のほか、がん研有明病院  
や東京医大八王子医療センター  
の患者会にも参加。大阪と福岡  
での悠声会発足にもかかわり、  
海外の患者さんとの交流や現状  
調査なども行っている。

「悠声会の仲間には、会社経営  
者も何人かいます。皆が口をそ  
ろえて言うのは、「シャント法

がなければ会社を続けられな  
かった」ということ。食道発声  
だと、なかなかここまで喋れる  
ようにはならない。現役世代で  
喉頭を摘出した方には、絶対に  
シャントがお勧めです」

とはいうものの、シャント法  
にも問題がないわけではない。  
最大のネックは費用の問題だ。  
プロヴォックスは3カ月に1  
度の交換が必要で、交換費用は  
1万2千円ほど。定期的に交換  
する人工鼻の購入費用も、毎月  
2万円前後に上る。

そこで、悠声会では、障害者  
に対する「日常生活用具給付制  
度」を利用して、人工鼻の購入  
費を助成してもらえよう、厚  
労省や各自治体に陳情を繰り返  
している。そのかいあって、現  
在は東京の町田市・八王子市・  
豊島区や、神奈川県横浜市など  
を皮切りに、月額2万3100  
円を上限に費用を補助する動き  
が広まりつつある。

## 患者と家族が泣いて 喜ぶ姿が見たい

退院後、1年半のT.S.1に  
よる抗がん剤治療を経て、元氣  
を回復した岩瀬さん。闘病体験

## シリーズ がんと生きる



奥さんと南九州旅行に行ったときの1枚。病気を経験してから、家族に対する感謝の  
気持ちが強くなった

を経て、自分自身の変化を実感  
する場面も少なくなかったという。  
「1つは、物事を俯瞰して見ら  
れるようになったこと。もう1  
つは、部下をより信頼して仕事  
を任せられるようになったこと  
です。それから、家族に対する  
感謝の念も強くなりました。年  
1、2回は女房と一緒に旅行す  
るようになり、つい先日南九  
州に行ってきたばかり。今年の  
秋には山陰地方に連れて行く予  
定です。女房は『当たり前よ』  
と言ってますけどね」

今年10月に開催される日本氣  
道食道科学会では、患者を代表  
してシャント法の体験談を発表  
する予定。これからも引き続き、  
シャント法を世の中に広める活  
動を続けていきたい、と抱負を  
語る。

「もしシャントと出合わな  
かったら、手術していなかった」  
という人は少なくない。でも、  
手術を拒めば、がんが進行して  
命を失ってしまいます。喉頭を  
摘出しても、シャントで話せる  
ようになると思えば、早めに手  
術に踏み切ることもできるし、  
仕事も辞めなくて済む。それは  
大きな希望だと思っています」

そう語る岩瀬さん。シャント  
で声を取り戻した患者さんと家  
族の喜びにふれることが、今の  
活動の支えになっているという。  
「手術後、何年も喋れなかった  
人が、シャントで喋れるように  
なったときのうれしさといった  
ら、ないそうですよ。プロヴォッ  
クスを入れて娘さんに電話した  
ら、娘さんが泣いて喜んだとい  
う話をよく聞きます。そういう  
話を聞くと、本当に『よかった  
なあ』と思います。ボランティア  
ア冥利に尽きますよね」